

永野慎一郎編 『韓国の経済発展と在日韓国企業人の役割』

岩波書店, 2010 年

韓国の経済発展についてはこれまで多くの研究が蓄積されてきた。しかし、在日韓国企業人が母国の経済発展にどのような役割を果たしたかという問題はこれまであまり解明されていなかった。この課題に取り組んだのが本書である。

本書は6章で構成されている。まず、第一章では在日朝鮮人が日本に移住するようになった歴史的背景が論じられ、第二章では戦後における在日韓国人的経済・経営動向が的確に説明されている(筆者は共に徐龍達)。特に45年解放直後から大阪を中心に在日商工団体が形成されてきた過程を詳細に論じた点は興味深い。第三章では、韓国経済発展に対する在日韓国企業人たちの貢献に関して5つの節で多面的に分析されている。

第四章では、韓国における大学支援など教育発展に寄与した15人の企業人と、文化・スポーツ面で貢献した2人の企業人を紹介している。第五章では、済州道出身の在日企業人が、済州道のみかん産業と観光産業の発展や道路舗装、学校建設などインフラ整備に貢献した事例が分析されている(永野慎一郎)。第六章では、在日コリアン社会における世代交代と社会・経済環境の変化の中で若い世代の在日コリアンの価値観の変化と課題を検討している(朴一)。

「韓国経済発展に対する在日韓国企業人たちの貢献」という本書のテーマにおいて第三章が中心になるので、より詳しく紹介しておきたい。一節では、「経済発展草創期の創業とアイデア提供」に関して、コーロン、起亜、韓一合織の事例を紹介している。コーロン・グループ創業者の李源萬は1930年代から解放直後まで日本で紡績などの事業を行い、それを土台に57年に韓国ナイロンを設立し韓国中堅財閥を築いた。李源萬は60年

代に朴政権に対して、輸出工業団地の設立や、カッラの輸出などのアイデアを提供した。輸出工業団地については九老工業団地として実行された。起亜の創業者である金喆浩は1930年に大阪で自転車部品とボルト・ナットを製造する工場を営し成功した後、44年に帰国している。韓一合織の創業者である金翰寿も30年代から44年まで大阪で衣服店を営し、50年代に韓国で貿易、繊維企業を営した。コーロン、起亜、韓一合織の創業者たちは、日本で起業した経験を生かし、日本で習得した技術と経営ノウハウを活用して韓国の産業発展に寄与したといえる。二節では朴政権時代に在日韓国人経済界が本国投資を進めていく過程を紹介している(一節と二節の筆者は永野慎一郎)。三節では、産業界に進出した9人の在日韓国企業人を紹介している。具体的には、日本で阪本紡績を発展させ韓国で邦林財閥を築いた徐甲虎、日本有機化学工業を創業した安在祐、ロッテグループ創業者の辛格浩、韓一グループ創業者の金相浩、民団中央団長であり韓国の大星電機を創業した朴炳憲、韓国の南部ハムを営する権泰殷、ソフトバンクの孫正義、大阪興銀の理事長であり韓国の新韓銀行設立に貢献した李熙健、関釜フェリーを設立した朴鍾である。四節では、在日の金融機関である関西興銀を母体に韓国において新韓銀行を設立する課程を分析している(梁京姫)。五節では、ソウルオリンピックやIMF危機において、在日韓国人が組織的に行った母国支援活動を紹介している(笠井信幸)。本書は、数多くの在日韓国企業人の創業から発展過程を紹介し、その韓国社会経済への貢献を紹介した好書といえる。

(高龍秀 甲南大学)